

日本鱗翅学会中国支部会報

第19号



フジミドリシジミ生息環境と卵（岡山県鏡野町越畑 角ヶ仙）

2018年4月

日本鱗翅学会中国支部

日本鱗翅学会中国支部規約

2001年12月2日制定, 2005年11月26日改正
2017年11月18日改正

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
- (2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
- (3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1) 支部長 1名
- (2) 事務局幹事 1名
- (3) 幹事 4名
- (4) 会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。事務局幹事は原則として支部長在任の県から選出された幹事がこれを務める。会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事と事務局が草稿を作成、編集する。会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
- (2) 支部助成金(本部に申請)
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年(2002年)1月1日から実施する。

この規約は、平成18年(2006年)1月1日から実施する。

この規約は、平成30年(2018年)1月1日から実施する。

(支部例会について: 第4回支部総会申合せ事項)

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

支 部 長 挨 拶

日本鱗翅学会の機関誌「蝶と蛾」が本年よりデジタル配信になりました。その背景にあるのは、会員数の減少とそれに伴う厳しい財政難です。紙データで送付するには多額の費用を要することから、学会の安定的な運営のためにはやむを得ないことかと思っています。会員数の減少、それに伴う財政難は各支部も同様で、特に小さな支部の一つである中国支部にとって極めて深刻な問題です。2017年中国支部例会（広島大会）の総会においても、このことが重要な議題となりました。例会参加者は減少し続けており、残念ながら昔のような勢いはありません。また支部会報は資金不足から、今の形で発行していくことが難しくなっています。しかし会員の研究発表と情報交換は、私たち中国支部の活動の大きな柱です。支部会員のみなさまの英知を集め、これらの活動を維持していきたいと考えています。

中国5県にはそれぞれいくつかの昆虫同好会が存在しますが、その活動状況に強い関心を寄せています。会員数の多い同好会、結構財政的に豊かな同好会、野外観察会などの活動が充実した同好会などさまざまです。私たち日本鱗翅学会会員は、このような昆虫同好会を日常活動の基盤としていることが多いと思います。これらの昆虫同好会の運営に中国支部にとっての大きなヒントが隠されているかもしれません。各県の昆虫同好会、あるいは鱗翅目以外の昆虫学会との交流を盛んにしていくことも、中国支部活性化の方法ではないかと思っていますので、会員のみなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

中国支部 岡野貴司

フレンチ・ギアナの鱗翅目

—ヒトリガがいっぱい—

田村 昭夫（鳥取県）

筆者は2017年9月19日より29日までフレンチ・ギアナ French・Guiana)に友人2人(松田裕一氏：日本鱗翅学会，法本智明氏：鳥取昆虫同好会)とともに出かけた(関空ーパリーーカイエンヌーパリーーアムステルダムー関空)。狙いはもちろん



図1 フレンチ・ギアナの位置

モルフォやアグリアスであるが，筆者の隠れた狙いは，ガからチョウ

ウに変更されたシャクガモドキや大型のカブトムシの採集である。結論から言えば，モルフォとシャクガモドキは採集できたが，アグリアスは全く見ることはできなかった。

未だ整理の途中であるが，振り返ってみたい。

採集地について

採集地であるフレンチ・ギアナ（県都はカイエンヌ）はフランスの海外県の一つである。それゆえ，パリでフランスの国内線に乗るのである。

フレンチ・ギアナに行くには必ず黄熱病の予防接種をする必要がある。予防接種をしていなければ入域できない。カイエンヌ入域では必ずチェックを受ける。中国地区では，黄熱病の予防接種は広島検疫所（広島港湾合同庁舎内：広島県広島市南区宇品海岸3丁目10）でき，予約し，出かける10日前までには接種す

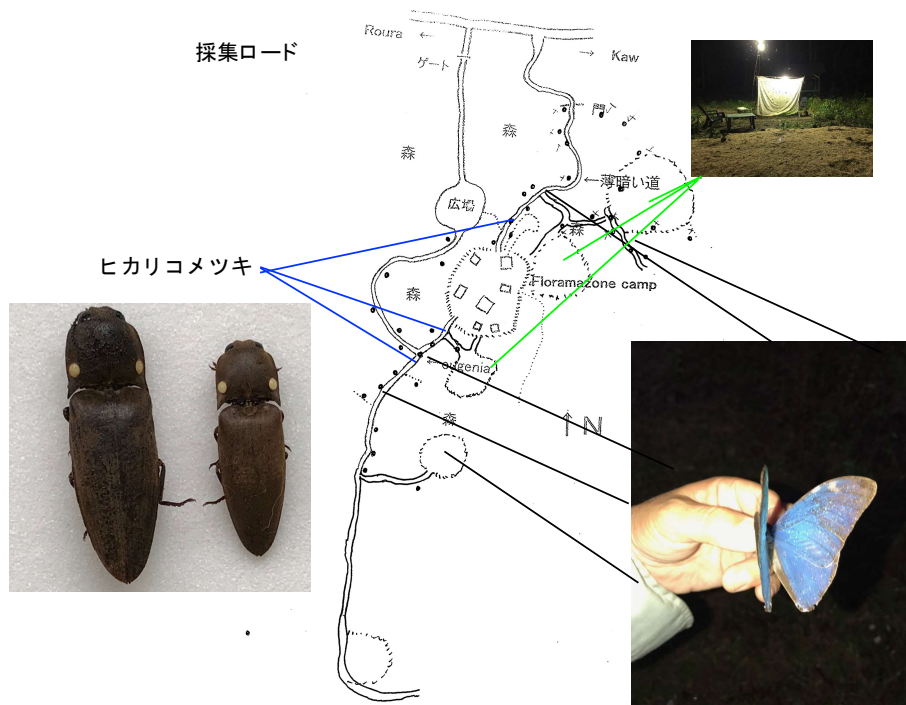


図2 採集ロード

る必要がある。一度接種すれば生涯免疫が消えることはない。

滞在地の Amazon Nature Lodge (N.043335, W.521225, Alt.300m 付近) は昆虫採集家のためのキャンプ地である。滞在中は採集し放題で、ライトトラップは3箇所にセットあり、ライトトラップを頼めば一晩中やってくれる (図2参考)。このようなキャンプはフレンチ・ギアナでは多くあると思われる。Amazon Nature Lodge はその一つである。よく日本人が訪れているので、我々もここを使った。

宿泊ロッジは、図中央の大きな円にある四角な建物である。1棟2人で宿泊でき、トイレやシャワー・ベッドなども整っている。自炊もできる。設備として冷凍庫があり、採集品を冷凍保管することができる。

現地では図のようなコースを箱トラップ (図中の小さな点が箱トラップ) の中を見回りながらひたすら歩きながら採集する。

図はユーゲニアモルフォ (*Morphoeugenia*) とヒカリコメツキの一種 (*Pyrearinus* sp.) を採集した場所である。どちらも活動時間が限られ、採集が困難な種である。

採集した鱗翅目

ここでは採集した鱗翅目の中で、筆者にとって特色ある種を述べる。

シャクガモドキ (Hedylidae) (図3)

シャクガモドキは今回の採集でぜひ採集したかった種である。今回2種 (*M. nigrimacula*, *M. tipulata*) 4個体を採集したが、いずれも灯火採集である。飛来する時間は決まっておらず、いつの間にか幕に来ていた感がある。

本科は、1986年 Malcolm J. Scoble によりチョウに分類された。外見はガそのものであるが、詳細を見るとチョウである (金沢, 1990; Malcolm Scoble, 井上, 1994; 広渡, 2011; 広渡, 2011; 矢後, 2015)。

ガにそっくりなチョウ

様々な図鑑では、チョウとガの区別点の一つとして触覚の形状にあるとよく記されている。すなわちチョウの触覚は「棍棒状」ガは「糸状」「羽毛状」などと記される。これは日本のみで通用することなのかもしれない。今回フレンチ・ギアナに出かけて改めて感じた。

図4の3個体を採集した時に、触覚の形状から「ガ」ではないかと思った。帰国後様々な資料をもとに同定した結果、「チョウ」であった。



図3 幕に来た
Macrosomanigrimacula
Warren, 1897

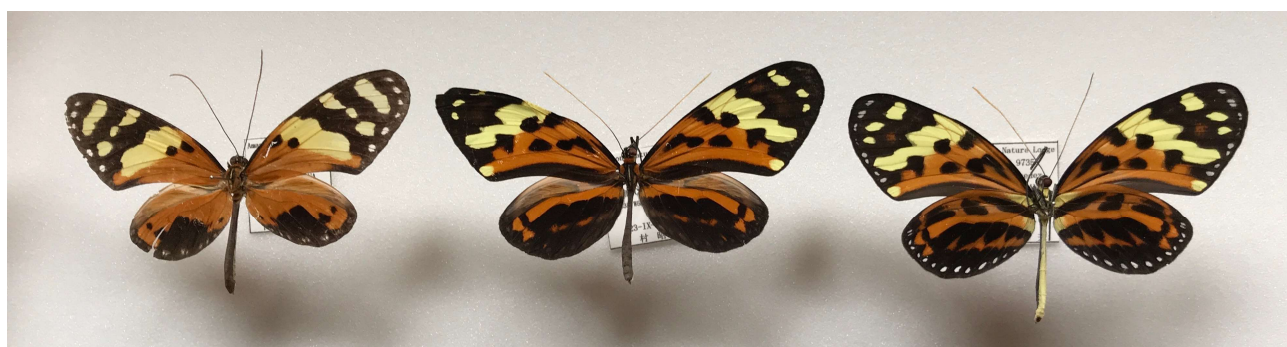


図4 ガにそっくりなチョウ
左 *Tithorea* sp. (カバタテハマダラの一種),
右2個体 *Heliconius hecale* (オオキマダラドクチョウ)

多様性に富むヒトリガの仲間

ヒトリガの仲間は世界で約 11,000 種が分布し、そのうち新熱帯区に約 6,000 種分布するという（上田・吉松，2011）。これは世界の半分以上の種が新熱帯区に分布することになる。まさしく新熱帯区は多種多様なヒトリガの世界である。日本のカノコガのような種，ドクチョウに擬態する種，ベニボタルに擬態する種など多種多様である。

ドクチョウに擬態するヒトリガ

図 5 は *Chetone catilina catilina* (Cramer, 1775) である。*Cecatilina* はアサギドクチョウ *Philaethria dido* に擬態している。本種は採集すると，サツマニシキ *Erasmia pulchella* のように胸部から白い大量の泡を出す。捕まえた時には驚いたが，自己防衛の一環であろう。ロッジに帰ってすぐに三角紙の交換をした。



図 5 *Chetone catilina catilina*
(Cramer, 1775)

ベニボタルに擬態するヒトリガ

ベニボタル科 (Lycidae) は，悪臭のある体液を分泌することにより他の動物より忌避され，カミキリムシやアカハネムシ，ある種のガなどの擬態モデルになっている（松田・佐藤，1985）。日本のベニボタルは赤と黒を基調とした色をしているが，南米にはカラフルな色をしたベニボタルが生息しているらしい。そしてベニボタルに擬態する数種の昆虫がいるという。このことは，現地に採集に来ていた鈴木遥氏（筑波大学大学院）から聞いた。筆者は残念ながら採集することも目撃することも叶わなかったが，インターネットで検索して黄色と黒のカラフルなベニボタルを見ることができた。

筆者は今回の採集した 3 種類のガと 2015 年に宮野昭彦氏採集の甲虫標本箱の中のカミキリムシの一種をみると，インターネットで見たベニボタルの一種とよく似ていた。このように同所的に数種の異科間の類似性が見られることを「数種の異科間の同所的形態の類似」という（大澤，2015）。南米ではよく見られると思うが，狭いロッジ周辺でこのような昆虫の生態を観察できるとは思ってもよらなかった。これらのガを含めて，もう少し調査したいと思うようになった。もちろんベニボタルも採集しなければならない。



図 6 ベニボタルに擬態するカミキリムシ（宮野昭彦氏採集）

図 7 ベニボタルに擬態するヒトリガ:左から *Cratoplastis rectiradia*, *Cratoplastis* sp., *Viviennea moma*

口吻の長いスズメガ

フレンチ・ギアナ には世界一口吻が長いと言われているスズメガが生息している。*Amphimoea walkeri* (Boisduval 1875)(図 8) である。採集に出かける前は，本種について全く知らなかったが，行ききの飛行機で「カラー版 昆虫こわい」（丸山宗利・著，幻冬新書）を偶然読んでいた中で知

った。口吻が長いだけあって、体全体も大きく飛び方も結構早い。この長い口吻を伸ばさないと蜜が吸えない花が、きっとこの周辺のどこかにあるに違いない。見たいものだ。

今回初めて訪れた南米のフレンチ・ギアナはたくさんの昆虫が生息している。どれもよく似ていて、同じ種類に見えてしまう。整理してみると、どこか小さく違っている。同じに見えて採集しなかった種が結構多かったと思う。ヒトリガしかり、ドクチョウしかり。あとでいつも思う「もっと採っておけばよかった」と。でも後の祭り。今回はそのことをとても強く感じた。



終わりに

今回初めて新大陸である南米に出かけたが、アジアの昆虫とは違う面白さがあった。見る昆虫がすべて新鮮であった。アクティオンゾウカブト *Megasoma actaeon* やギガンティウスゴキブリ

図 8 *Amphimoea walkeri*
(Boisduval 1875)

Blaberus giganteus, オオフシナガイトトンボ *Mecistogaster lucretia* など南米を代表する巨大な昆虫も採集することができたことは良かった。残念なのは天候の関係なのか、モルフォが少なくアグリアスにいたっては3人とも見ることはできなかった。時期なのか、メダマヤママユも全く見られなかった。宿題が残った感じである。もしまた行く機会があれば前述したようにベニボタルとガを含めたその他の昆虫の関係を調査してみたい。

謝辞

今回の採集旅行にあたり、次の人たちにお世話になった。記して感謝の意を表す。

沼田・高橋の両氏には、出かけるにあたり様々な有益なアドバイスをいただいた。北浦・鈴木の両氏には現地で何かとお世話になった。そして宮野氏には、2015年に採集された貴重な甲虫標本をいただいた。

殊に沼田氏には旅行開始前、そして終了後など多岐にわたり色々とお世話になった。
北浦広海・宮野昭彦・沼田康夫・鈴木 遥・高橋耕二

引用文献

- 広渡俊哉 (2011) 鱗翅類の概要. 418-420. 岸田泰則 (編) 日本産蛾類標準図鑑 I. 352pp. 学研教育出版, 東京.
- 広渡俊哉 (2011) シャクガモドキ上科. 418-420. In; 駒井古実・吉安 裕・那須義次・斉藤寿久 (編) 日本の鱗翅類一系統と多様性. Xx+1308pp. 東海大学出版, 東京.
- 金沢 至 (1990) I.チョウのルーツをさぐる. 3-27. 大阪自然史博物館 (編) 大阪自然史博物館第17回特別展解説書 蝶・蛾の世界—蝶のルーツをさぐる—. 61pp. 大阪自然史博物館.
- Malcolm Scotle (著), 井上 寛 (訳) (1994) 熱帯アメリカの蛾のような蝶 (鱗翅目: シャクガモドキ科). やどりが 158:2-10.
- 松田 潔・佐藤正孝 (1985) ベニボタル. 92-107. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 (編) 原色日本甲虫図鑑 III. X+500pp. 保育社, 大阪.
- 大澤省三 (2015) 多様性に満ちた甲虫の進化—変容する形態・機能の世界. 348-394. In; 大場裕一・大澤省三・昆虫 DNA 研究会 (編) 遺伝子から解き明かす昆虫の不思議な世界—地球上で最も繁栄する生き物の起源から進化の5億年. 621pp. 悠書館, 東京.
- 上田恭一郎・吉松慎一 (2011) ヤガ上科. 466-496. In; 駒井古実・吉安 裕・那須義次・斉藤寿久 (編) 日本の鱗翅類一系統と多様性. Xx+1308pp. 東海大学出版, 東京.
- 矢後勝也 (2015) チョウにみる進化と多様性—DNAによって解明される分化・擬態・共生の世界. 252-310. In; 大場裕一・大澤省三・昆虫 DNA 研究会 (編) 遺伝子から解き明かす昆虫の不思議な世界—地球上で最も繁栄する生き物の起源から進化の5億年. 621pp. 悠書館, 東京.

山口県の鱗翅目目録について

後藤 和夫(山口県)

■ はじめに

山口県では全昆虫類をまとめたものとしては、1988年に発行した山口県の昆虫(山口県立山口博物館(編), 1988)が良く知られている。その後、全体をまとめたものとして、レッドデータブックやまぐち(山口県自然保護課(編), 2002)や、レッドデータリスト2011(山口むしの会稀少昆虫類選定委員会(編), 2011)と段階的に昆虫類が集約されてきた。

ただこれらは基礎的な目録としての評価はできるものの、データの一部を伴わないことと、昆虫類の分類上の整理も古いままになっており、未報告のままになっていた目録などもあり、学名など最新のものとして見直し整理する必要性も高まっていた。

このことから2015年末現在の昆虫目録を作成する委員会(山口県立山口博物館・山口むしの会)を設立し、2014年から昆虫目録作成の諸作業を実施してきた。完成は2016年度を目標に進めていたが、諸般の事情により遅れて2017年10月にDVDとして発行した。

ここでは鱗翅目のガ類とチョウ類について、その概要について述べる。

■ 鱗翅目目録の概要

・ガ類について

チョウ目(ガ類)は農作物や植林木、あるいは人体に害を及ぼすとされる種、また逆に人間社会に産物をもたらす種(カイコなど)については研究が盛んになされてきた。しかし、人間の利害に直接関係のない多くの種については研究の対象から外れがちで、未解明な部分が多く残されている。山口県でもその傾向がみられ、特に生態や生息状況の調査データは、同じチョウ目であるチョウ類に比較すると極めて少ない。

山口県のガ類に関して確認できた文献で最も古いものは、1960年に下関市の蛾類目録を記録した「北九州の昆虫」である。1970年代になって故三好和雄氏らが山口県の自然に記録を残している。1990年以降は、蛾類通信、誘蛾灯、月刊むしなどの全国誌での記録も散見されはじめ、徐々に同好者の活動も活発になり周南昆虫同好会の会誌「ちょうしゅう」にもガ類の記録が掲載される。また、山口大学理学部の遠藤克彦研究室による蛾類の定点調査の結果、伊藤靖子氏や山中明氏ら研究室関係者により多くの基礎データが得られた。2001年に全県組織の山口むしの会が発足すると、計画的に月例調査会を実施するなどの成果により、会報「山口のむし」に県内各地の記録が充実してきた。

これら多くの山口県産ガ類データを集約しながら文献にされていなかった、岡 耿一郎・田中伸一の両氏がまとめた県内のデータには、1960~2010年までに報告された県産ガ類の文献上の記録の大半が網羅されているが、この機会に「山口県産蛾類収集データ集2016年度版」として山口県立山口博物館から報告された。

このまとめは、上述の文献のデータと2011年以降に掲載されてきた文献上の全ての記録、および官公庁などが行った調査データも加味し総整理したものである。(山口県の昆虫目録2016, 山口県のチョウ目(ガ類)の概要引用)。

・チョウ類について

チョウ目（チョウ類）は、昆虫類の中では比較的視認・分類が容易で、それ故に研究者や愛好家が多いために、調査報告などの情報の集積度は高い。

山口県のチョウ類に関する重要な文献を紹介すると、上村正・兼子（1962）が当分野の研究に不可欠な存在で、迷蝶・偶産蝶を含め、現在までに確認されている種数の77%に当たる110種のチョウ類が記載されている。その記録の多くは「山口県の自然」（山口県立山口博物館発行）による。この間、ほかに三好和雄らが活躍したが、調査地は県内のごく一部に過ぎず、当時の中部～九州地方における昆虫の著名産地を紹介した「新しい昆虫採集案内Ⅱ」（京浜昆虫同好会（編）、1971）にも、チョウ類については具体的な記述がほとんどない。

やがて、県内のチョウ類愛好家の活動の活発化を背景に、下関昆虫同好会の発足・会誌の発行（1980年）、周南昆虫同好会の発足・会誌「ちょうしゅう」の発行（1987年）と続き、山口県の昆虫（山口県立山口博物館（編）、1988）において、戦後の山口県におけるチョウ類の記録が整理、紹介された。

その後2000年前後までは、全国的なチョウ愛好家の活動の活発化に伴い、蝶研フィールドなど全国誌による記録も散見されるが、県内の記録の主要な情報は、発足後の同好会活動が長く継続した周南昆虫同好会の「ちょうしゅう」が占める。

2001年には先述の地域同好会等を発展的に解消し、フリーだった愛好家の参加も促して全県組織の山口むしの会が発足し、月例調査会をはじめとして他の昆虫類を含めた未調査地域の解消へ向け精力的に活動を行っている。県下のチョウ類の情報は、報文数で見るとその大半が2002年以降の当会会報「山口のむし」によるものである。

このたびのまとめでは、以上のようなチョウ類愛好家の活動から発表された報文の総ざらいとともに、官公庁等が独自に行った調査データも加えて、現在の分類に併せて整理した。（山口県の昆虫目録2016、山口県のチョウ目（チョウ類）の概要引用）。

■目録作成上の要点

目録に掲載された昆虫類は全て出典(文献)が公的に明かであることを基本に集約している。よって個人の所有物や、たとえ山口県の初記録になるような種が採集されていたとしても、正式に報告されていない記録はこの目録から除外している。

ただ公的に報告された記録であっても、時間の制約上、文献の収集や標本の同定確認ができなかった一部の記録については、掲載できなかったものもある。これらはこの目録をベースに調査を継続し、判明した時点で加筆、修正をしながら、県内の鱗翅目全体の把握に努めることにしたいと考えている。

■ チョウ目のガ類とチョウ類のまとめ

山口県の鱗翅（チョウ）目の2015年末現在の総種数は表-1, 2に示すように、65科2507種が記録されている。そのガ類の内訳は、60科2364種となり、チョウ類の内訳は5科143種が目録に掲載されたことになる。

表-1 山口県のチョウ目目録の内訳
チョウ目(蛾類)

科	学名	種数
1 コバネガ科	Micropterigidae	2
2 コウモリガ科	Hepialidae	2
3 ヒゲナガガ科	Adelidae	16
4 マガリガ科	Incurvariidae	1
5 ヒロズコガ科	Tineidae	21
6 ミノガ科	Psychidae	4
7 ナガヒゲガ科	Amphitheridae	1
8 ホソガ科	Gracillariidae	17
9 スガ科	Yponomeutidae	18
10 クチブサガ科	Ypsolophidae	6
11 コナガ科	Plutellidae	2
12 アトヒゲコガ科	Acrolepiidae	4
13 ホソハマキモドキガ科	Glyphipterigidae	6
14 マイコガ科	Heliodontidae	1
15 ハモグリガ科	Lyonetiidae	1
16 スヒロキバガ科	Ethmiidae	4
17 [ヒラタマルハキバガ類]	Depressariidae	7
18 クサモグリガ科	Elachistidae	1
19 オビマルハキバガ科	Deuterogoniidae	1
20 メスコバネキバガ科	Chimabachidae	1
21 マルハキバガ科	Oecophoridae	14
22 ヒゲナガキバガ科	Lecithoceridae	8
23 ニセマイコガ科	Stathmopodidae	2
24 ネマルハキバガ科	Blastobasidae	1
25 [ホシマルハキバガ類]	Autostichidae	3
26 [エグリヒラタマルハキバガ類]	Peleopodidae	1
27 カザリバガ科	Cosmopterigidae	12
28 キバガ科	Gelechiidae	37
29 ネムスガ科	Galactiidae	1
30 セミヤドリガ科	Epipyropidae	2
31 イラガ科	Limacodidae	16
32 マダラガ科	Zygaenidae	15
33 スカシバガ科	Sesiidae	16
34 ボクトウガ科	Cossidae	3
35 ハマキガ科	Tortricidae	186
36 ハマキモドキガ科	Choreutidae	5
37 ニジュウシトリバガ科	Alucitidae	2
38 トリバガ科	Pterophoridae	17
39 セセリモドキガ科	Hyblaeidae	2
40 シンクイガ科	Carposinidae	1
41 マドガ科	Thyrididae	11
42 メイガ科	Pyralidae	125
43 ツトガ科	Crambidae	245
44 カレハガ科	Lasiocampidae	14
45 オビガ科	Eupterotidae	1
46 カイコガ科	Bombycidae	4
47 ヤママユガ科	Saturniidae	8
48 イボタガ科	Brahmaeidae	1
49 スズメガ科	Sphingidae	45
50 イカリモンガ科	Callidulidae	2
51 アゲハモドキガ科	Epicopeiidae	3
52 カギバガ科	Drepanidae	49
53 ツバメガ科	Uraniidae	10
54 シャクガ科	Geometridae	487
55 シャチホコガ科	Notodontidae	84
56 ドクガ科	Lymantriidae	34
57 ヒトリガ科	Arctiidae	62
58 コブガ科	Nolidae	49
59 ケンモンガ科	Pantheidae	8
60 ヤガ科	Noctuidae	662
		2364

60科(所属未定の類を含む) 2364種(2015年12月末現在)

文 献

- 山口県立山口博物館(編), 1988. 山口県の昆虫. 198pp., 山口県立山口博物館, 山口.
- 山口県環境生活部自然保護課(編), 2002. レッドデータブックやまぐち. 513pp., 山口県.
- 山口むしの会稀少昆虫類選定委員会(編), 2011. 山口県の昆虫類レッドリスト 2011. 198pp, 山口むしの会.
- 山口むしの会(編), 2017. 山口県の昆虫目録 2016. 38pls., 1811pp., 山口県立山口博物館.
- 重中良之・村田 淳, 2017. 山口県の昆虫目録・ガ類. pls.23-30, pp.1061-1645.
- 川元 裕, 2017. 山口県の昆虫目録・チョウ類. pls.31-38, pp.1646-1810.
- 後藤和夫, 2017. 山口県の昆虫目録について. pp.1-3. 画像担当.
- 稲田博夫, 2017. 山口県の昆虫目録のDVD表紙・画像担当.

表-2 山口県のチョウ目目録の内訳
チョウ目(蝶類)

科	学名	種数
1 セセリチョウ科	Hesperiidae	19
2 アゲハチョウ科	Papilionidae	15
3 シロチョウ科	Pieridae	11
4 シジミチョウ科	Lycaenidae	44
5 タテハチョウ科	Nymphalidae	54
		143
5科 143種(2015年12月末現在)		総計 2507

岡山県南西部におけるウラギンスジヒョウモンの現況

藤本 徹哉（広島県）

1. はじめに

全国的にはウラギンスジヒョウモンの棲息はまだ危機的ではないかもしれない。しかし、西南日本での本種の衰退は(間野・藤井,2009)を見てもかつてのオオウラギンヒョウモンを彷彿とさせるものがある。

とはいうものの、一般的な認識とはかなり違って、筆者のフィールドでは大型ヒョウモン類の中では最も環境に適応して個体数も多いように見える。実際、笠岡、井原の二市に跨って点在する棲息地は、本種の本래のそれとされる草原や湿地ではなく、とくに小田川以南で棲息を確認した地点のすべてが耕作放棄地である。岡山県笠岡市での本種に関して、筆者は(藤本, 2017)にて他の草原性の3種とともに報告した。2017年はその反省も踏まえ継続調査し、耕作放棄地に本種が棲息するための環境面の条件がある程度わかってきたように思うので、新たに判明した分布、生態などと合わせ報告する。

2. 分布

調査地域は井原市中部～南部と笠岡市の北部～中部である。この地域を、高梁川支流の一つ小田川が南北に分断する。大雑把に言ってその北側が吉備台地に属し、南側は低標高の丘陵地帯である。これは、東の高梁川と、西の芦田川が作った二つの平野部を隔てる小規模な低山帯の一部であり、倉敷市南西部から福山市東部まで似た地形と景観が広がっている。

2017年には、丘陵地帯の既知の棲息地の再確認とともに、棲息地の広がりを確認するため、より広い範囲での調査を行った。また、丘陵地帯の個体群が北側の吉備台地南端部から供給されたものであろうとの仮説を立て、岡野貴司氏の協力を得て小田川以北の調査を行い、そこでは本種がより安定した環境に棲息していることを確認した。図1の航空写真上に黄色丸印で確認地点を示す。小田川以南のマークが多いのは調査機会が多いことに加え2012年以降のデータをすべて記載しているためであり、必ずしも2017年時点での棲息地であることを意味しない。また小田川以北での調査は十分とはいえないが、最も北のマーク付近の美星町には多くの棲息地があり、一か所だけではないことを断っておく。本図から、吉備台地の棲息域が小田川近くまで南下すること、南側の丘陵地帯では面的な広がりを持って棲息することが見て取れる。小田川を挟んで南北の棲息確認地点間の距離は直線で7km弱であり、吉備高原の個体群が丘陵地帯へ棲息地を拡大した、という仮説はもっともらしいと考える。

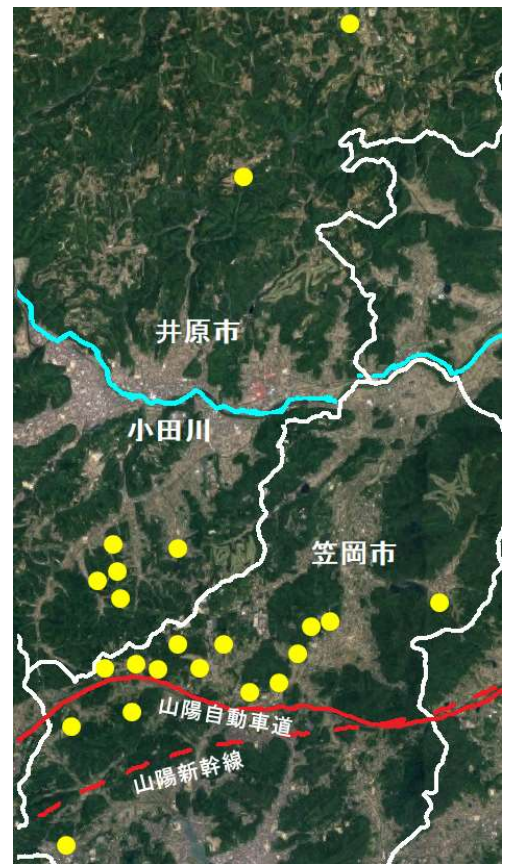


図1 本種確認地点



写真1 本種の棲息する耕作放棄地 (June 2017)



写真2 本種消失直後の元棲息地 (July 2017)

3. 棲息環境

林に隣接した草原や湿地、河川敷などに棲息する、と文献(福田他, 1983)にはある。この調査を行う前の筆者が知っていた棲息地は実際にいずれもその範疇にあった。しかし、小田川以南の丘陵地帯には草原も湿地も河川敷を持つ河川もない。にもかかわらず本種が棲息できる理由は、耕作放棄地が提供する環境に、本来の棲息地に通じる何かがあるからだと考えてよいだろう。

丘陵地帯で確認できた棲息地は前述のようにすべて耕作放棄地であるが、耕作放棄地でありさえすればどこにでもいる、ということはない。棲息地には共通してみられるいくつかの特徴がある。

第一に、耕作放棄地が高茎草原化していることである。ここで、高茎草原という語については説明したほうがよいかもしれない。この語はふつう高山、高緯度地、湿地など森林化しにくい場所の、比較的背の高い草本に覆われた草原をさすものと思われる。典型的なものは北海道の原生花園や山岳地帯の急傾斜地の草原であり、代表的な植物はキスゲやユリ、ヤナギラン、ボウフウなどであろうか。本種の棲息地が高標高地や湿地の場合、こういった環境であることが多い。しかし、高茎草原を、文字通り、高さ1~2メートルの粗大な草本が生えている場所、と考えたらどうだろう。耕作放棄地はそういう構造になりやすい。植物として多いのはセイタカアワダチソウ、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、ススキなどである。写真1にその一例を示す。もともと、緩斜面に築かれた棚田が一面に広がっていたが、数年前から耕作放棄され始め、現在は手前側のまだ使われている水田と、奥の竹林を隔てる数面の田にほぼ一面にセイタカアワダチソウが生い茂っている。発生期にはこのセイタカアワダチソウ一色の「高茎草原」上を飛ぶ本種の姿が見られる。

第二に、草地のすべてが高茎草原ではない、ということがある。調査地域での耕作放棄地の環境は、大略、次のように推移する。(1)もともと畦にあった背の低い植物が放棄された田畑に生える(2)そこに前記した植物が生えて高茎草原が形成され、背の低い植物は徐々に駆逐される(3)畦や土手も高茎草原化する(4)ヌルデ、シンジュなど生育の速い木本が侵入、といった流れである。おそらく最後は全体に二次林化するかクズのマント群落に覆われた深い藪になる。(1)~(4)まで、早ければ4、5年であるが、棲息地全体が(3)以降のステージに進むと、本種の棲息はまず確認できなくなる。観察者の立場から言えば、(2)までは棲息地内を容易に移動でき、(3)になると移動はおろか侵入も困難になり、かつ棲息も確認できなくなる。いなくなっても数年は頑張るって調査するが(4)の段階に至って完全に断念してしまう。筆者は実際にいくつかの棲息地がこのような経過をたどって姿を消すのを観察してきた。写真2は2014年まで良好な棲息地であったがその後2年間で個体数は激減、かつ侵入も困難になり2016~2017年は探索したものの本種の姿はなかった。ヒメジョオンとセイタカアワダチソウが繁茂し、ススキが点在する一見良好な環境であり、高茎草原としての構造そのものには大きな変化がないが、全体に(3)の段階になってしまったことが棲息しなくなった原因と考えている。

この二つの条件を満たす場所、というのは、耕作放棄が徐々に進み、やや時間がたって高茎草原化した場所と、放棄後日が浅いか耕作中の場所や、農道、畦道などの陽地がまだらに存在する場所、ということになる。写真3では、中央に耕作放棄後一年の水田、左下段に放棄後3~4年経過したセイタカアワダチソウの原、右上段に車数台止められる程度の草地があり、良好な棲息地となっている。ホストとなるスマレはもちろん畦道などによく生えているのだが、比較的短時間で放棄田へ侵入し、群落を作る。この棲息地では中央の新しい放棄田に多数のスマレ群落がみられる。これらの観察を通じ、筆者は、第二の条件は、ホストとなるスマレ類が生育するために一定の陽地が必要なためと推測している。

吉備台地の状況は、小田川以南とやや異なっている。この地域はなだらかな起伏をもつ準平原である。大部分はよく耕作されているが、緩やかな起伏や残丘があるため耕作地の周りや溜め池周辺などに小規模な平地や緩斜面が多く残っている。こういった場所は、耕作地の際まで二次林が繁茂することを嫌ってか、積極的に草地として維持されているわけではないものの適度に人の手が入って二次林化が抑えられており、結果的に前記した高茎草原状態が長く続いているようだ。写真4(岡野貴司氏提供)がそのような場所の例である。

このようなことから、2節で述べた分布に関し、本来の分布は小田川以北の吉備台地が南端であり、そこから南の低山帯の棲息地は耕作放棄地が本種の棲息に適した状態になったときのみ発生地となる一時

的な分布かもしれない、と考えるに至った。言い方を変えれば、平地がほぼすべて耕作されていた 20～30 年前には棲息していなかったと思われるし、いずれ耕作放棄地の供給が絶えれば姿を消すのであろう。

本節の最後に、ここで述べたモデルを象徴する棲息地を紹介したい。写真 5 は小田川流域の水田地帯の棲息地のものである。本種♂が田の畦のアザミで吸蜜し、水田の向こうには集落、さらに向こうには交通量の多い県道が走る、ごくふつうの平野部の農村風景である。写真 6 がその後背地であり、手前に放棄後 1～2 年の水田、左奥に耕作中の水田、中央奥にセイタカアワダチソウの茂る耕作放棄地があり、手入れの悪い畑や果樹園が点在している。ごく小規模であるから、もちろん多くの個体がいるわけもないが、それでも棲息地の体をなしているのだ。

4. 生態，行動

昨年(藤本, 2017)にて、本種の配偶行動の特徴である、♂の探♀飛翔について詳しく述べた。しかし、それは誤りではないが十分な観察ではなかった。それまで、筆者は面倒で困難な高茎草原内部での写真撮影を避けて、周囲からの観察・撮影を行っていたためである。放棄田の水平面上に生育した高茎草原は、高さが揃っていて密度も高い。♂が探♀飛翔を行う主な領域はむしろこの内部にある。高茎草原の外からはほとんど見えない、植物の高さよりもかなり下を飛ぶことがわかった。本種にとっての高茎草原とは、自由に飛翔できる空間を草原の内部に持つ、環境というよりはむしろ三次元的な構造である、というのが現在の筆者の理解である。

写真 7 では、植物は人の腰の高さ程度なので、飛翔が膝の高さ程度であることがわかると思う。なお、後方の人物は、本種の観察のため筆者のフィールドを訪問された岡山の難波通孝氏である。

越夏後の行動に関しても、昨年の報告で述べた、拡散のため個体密度が著しく下がり遭遇の機会がないためであろう、という推測は正しくなかったように思われる。秋の放棄田は背丈を大きく超えてセイタカアワダチソウが密生しており、彼らに気付かれずに侵入することは不可能に近いが、上から、および真横からの観察によって、♂は秋期も越夏前と同様に高茎草原の深いところを活発に飛翔していることが確認できた。筆者にそれを証明する写真を撮影する技量がなかったことが残念でならない。



写真 3 緩慢に耕作放棄が進む棲息地 (July 2017)



写真 4 美星町の安定した棲息地 (July 2017)



写真 5 水田脇のアザミで吸蜜 (6 July 2017)



写真 6 条件を満たす小規模棲息地 (July 2017)

一方、♀は越夏後も不活発であり、写真8のように高茎草原の内部で静止している個体を見かける。飛び立つのは産卵のためであろう、草原の奥深くへ飛んでいくが追跡は容易でない。産卵行動中の♀は、セイタカアワダチソウの密生する暗所をごく低く飛び、着陸したのち、少し歩いてから産卵する。写真9では丸く巻いた枯葉の中に腹端を挿入して産卵している。産卵場所は非常に暗く、付近にスマレはなかったため、孵化した幼虫はホスト探索のため長途の旅をするのであろうか。スマレがある畦や露地での産卵は確認できなかった、より正確には、♀はそもそもそのような陽地には姿をあらわさない。

このように、越夏を挟み、雌雄ともに高茎草原内を主な生活空間としていることから、越夏そのものもこの内部で行われるのではないかと考えてはいるが、現時点では想像に過ぎず今後の課題である。



写真7 雄の探♀飛翔 (17 June 2017)



写真8 高茎草原内で休息する♀ (8 Oct. 2017)



写真9 高茎草原内で産卵する♀ (8 Oct. 2017)

5. おわりに

人口密集地に近く、自然度が高いとは言えない丘陵地帯に本種が棲息していることは、偶然に発見した時点では驚くとともにとても意外に思えた。しかし、彼らの行動を観察していくうちに、耕作放棄地が提供する環境がどうやらよく適合しているように思われ、少しずつ納得できるようになってきた。もちろん吉備高原という供給源の存在は重要である。しかし、耕作放棄が緩やかに進む低標高の丘陵地帯は全国に普通にあり、本種の棲息地も減ってはいるが各地に存在する。本来の棲息地の環境悪化、というよりも、その周辺の耕作放棄地に適合することで新天地を開拓して一時的に栄えている個体群はおそらく各地に存在するはずだ。本報告が本種の新たな棲息地の発見への刺激となることを念じてやまない。

最後に、筆者の調査に、激励とともにたびたび同行、情報提供いただいた岡野貴司氏に深謝します。

参考文献

- 1) 福田晴夫ほか. 原色日本蝶類生態図鑑(II)(1983).
- 2) 藤本徹哉(2017)岡山県笠岡市の草原性チョウ類4種の現況について. 日本鱗翅学会中国支部.
- 3) 間野隆裕・藤井恒(2009). 日本産チョウ類の衰亡と保護. 日本鱗翅学会.

岡山県のブナ林とフジミドリシジミ

三宅 誠治（岡山県）

はじめに

岡山県では、ブナの自生が主に中国山地に限られるが、その地域では植林事業が進展しているためにブナ林は残り少なくなっている。その関係で、フジミドリシジミは生息地が局限され記録も少ない。これが岡山県のフジミドリシジミについての一般的な認識だった。しかし、実際の生息状況はどうか、それが不確かなまま絶滅の危機を論じても仕方ないので、まずそれを解明しようというのが、筆者がフジミドリの生息調査を思い立った動機である。現地調査は、2010年に着手し、当初はそれほど長くは掛からないだろうと安易に考えていたが、実際には6シーズンで100日あまりを要した。個々の記録や調査結果は既に報告済み（三宅，2017）であるが、本稿ではレッドデータの観点から更に掘り下げてみることにした。また、この調査過程に於いてB型の♀を得て、これも報告済みであるが（三宅，2016）、これについても他の記録と共に俯瞰してみたい。

過去の記録

岡山県では、筆者が調べた限りでは調査に着手する以前に63編の報告が成され、そこには190の記録が記されていた。ただ、それらは過去の記録を引用して述べたものや、既に見つかっていた生息地での再記録を記述したものが多く、これらの中から生息地を数え上げると、確かなものに限ると岡山県内では18か所ということになった。また2012年に1か所で記録され、生息地の合計は19か所となった。確かにこの数字だと、岡山県では希少な種と言うことが出来よう。これらの場所を図1.に表す。

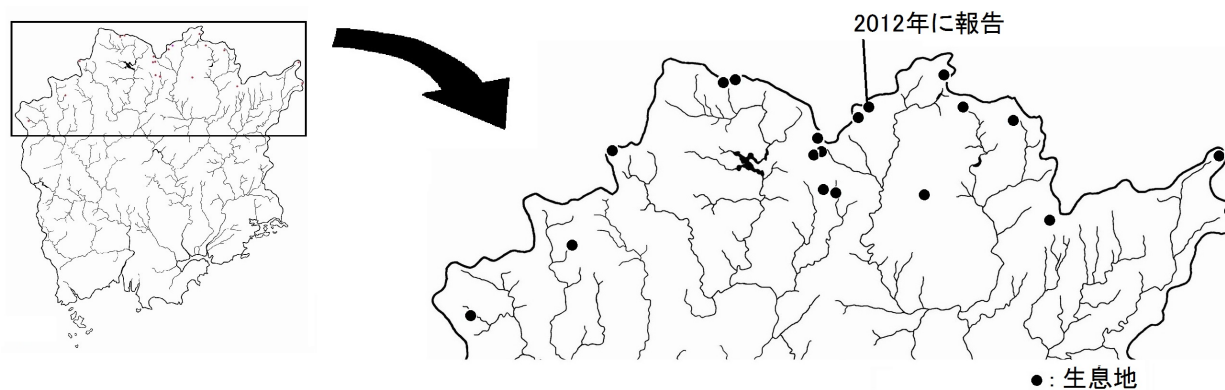
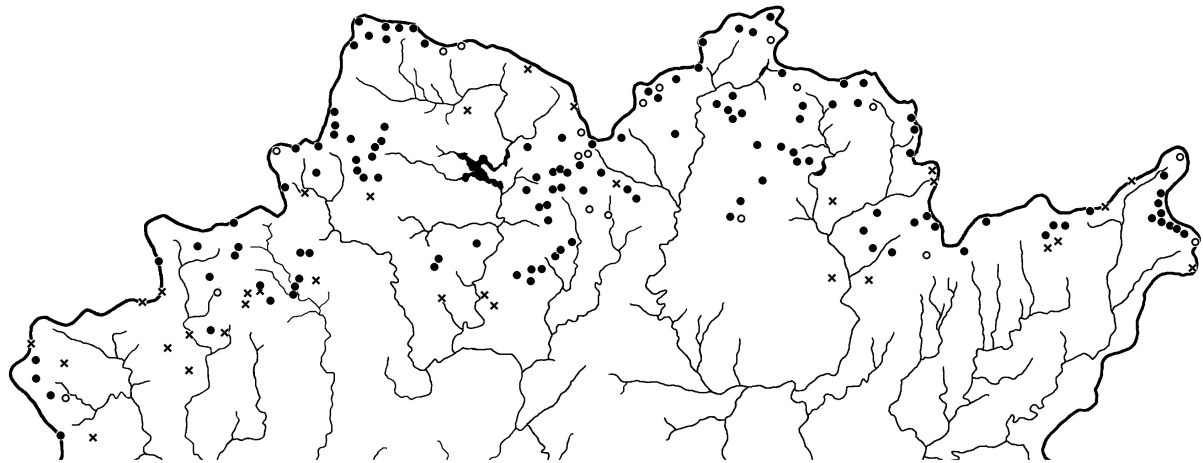


図1. フジミドリシジミの既知の生息地

調査結果

現地調査は、過去に記録された場所すべてについて再調査し、また新たにブナ・イヌブナの生える環境で可能な限り多くの生息地を探すことにした。この結果、過去に記録があった場所ではすべて生息を再確認でき、また125か所で新たに生息地を見つけることができた。これらを合わせると、図2.に示すように岡山県内の144か所に本種が生息することとなり、思いのほか多くの生息地が残っていることが判明した。



- : 生息地
- : 2012年以前に記録された生息地
- ×: 生息を確認できなかった場所

図2. フジミドリシジミの岡山県内の最新分布

本種を取り巻く環境

森林性の昆虫について、衰亡の要因としてよく指摘されるのが森林伐採である。ただ、筆者が岡山県北部の山々を歩いてきた間には、伐採現場に殆ど出会わなかった。少なくとも岡山県北部において、伐採は非常に希になったと考えられる。また、特に山陰地方が有名ではあるが、中国地方では中世以降、たたら製鉄が非常に盛んに行われていた。岡山県も同様で、たたら製鉄に関する遺跡・痕跡は県下のそこら中に点在している。現在、自然あふれる広葉樹林が貴重ということで県立公園や国立・国定公園の特別保護地区に指定されている場所でさえ、過去には製鉄が行われていた場所である。当時の景観は今とはまったく異なり、かんな流しが行われる荒涼とした場所だったり、炭焼きのための伐採場だったり、或いは熱気が立ちこめるたたら場であったはずである。また、広葉樹林のみならず植林の中でも、歩けばそこそこに炭焼き窯の跡が見られる。それほど過去に山林は伐採されて炭が供出されていたのである。こういった山林の利用は近代製鉄法に移行する約 100 年前まで続いていた。その後、たたら製鉄の衰退に合わせて森林は放置されて回復が進んだが、昭和の時代になって木材の需要が高まると再び伐採が進み、その跡地に有用材として針葉樹の植林が行われた。現在は林業も衰退傾向で、新たに植林が広まる傾向は乏しい。むしろ広葉樹林の価値が見直されて山林が自然に帰して行き、またブナやミズナラを植林することも行われている。これらのことから現在は、岡山県北部の山林では、潜在植生は減少するよりもむしろ回復傾向の方が強いと考えられる。即ち、フジミドリシジミを育む環境は、悪化よりも好転している時期と言える。

次に問題視されるのは、温暖化の影響だが、「温暖化影響評価・適応政策に関する総合的研究」2014 報告書（独立行政法人国立環境研究所，2014）では、今世紀末には国内で気温が 1~6℃上昇すると予測されている。またそれに伴い、中国山地ではブナは安定的植生を維持できないとされている。本種の食樹であるブナが絶えれば、当然本種も生存することは出来ない。本種の運命を明確に表していることになる。ただ今はまだ多くの生息地が存在することから、それほど深刻な状況に至っていないとも言える。今後、温暖化が進行し本種の生息状況の悪化が観測されだした時に、あらためて検討すれば良いことと考える。

RDB 判定について

筆者は判定を下す立場ではないが、岡山県の本種に対する判定が、希少種、準絶滅危惧、留意と、担当する機関やその時々で変化してきた。過去には本種の生息に関する情報が不十分だったために、思い込みが先行して判断を誤らせてきた結果であろう。今回の調査で、本種の生息状況がかなり判明したため、やっと判断材料が整ったと言える。蝶に限っても多くの種が減少傾向にある中で、本種はまだまだ安泰な部類に入ると思われ、現状では絶滅が危惧されるような状態では無いと考えている。

雌の B 型について

これまでの話とは無関係ではあるが、関連する話題として B 型の雌について纏めておきたい。フジミドリシジミの雌の翅表は、一般的に無紋で O 型と呼ばれている。しかし、希に青色鱗粉を持った個体がいることも知られている。筆者も、今回の調査で 136 頭の雌を飼育により羽化させたが、この中に 1 頭だけ B 型が含まれていた。過去の記録を調べたところ、以下の表 1. に示すものが見つかった。なお青色紋の説明は、報告の記述を要約したものである。

これらに筆者の記録を加えると、これまで B 型として 20 頭が報告されている。そしてそれぞれの紋の特徴から、図 3. に示すように前翅中央付近に現れるもの (I 型とする)、亜外縁に帯状に現れるもの (II 型とする)、その両方を併せ持ったもの (III 型) の 3 タイプに分けることができる。最も多いのは I 型でこれまでに 17 頭が確認されている。次に II 型で 2 頭だが、この 2 頭は飼育羽化した年は異なるが同じ産地かごく近い場所である。III 型は、筆者が飼育羽化させた 1 頭のみである。

吉阪道雄(1959).フジミドリシジミの B 型斑を具えた♀.Insect Magazine, (47):43.	
1♀-I 型	鳥取県 大山 1958.VII.5 採集 左前翅にかすかに B 型紋
灰谷輝雄(1962).翅表に青色鱗片を散布したフジミドリシジミの雌.観察,10(2/3):23-24.	
1♀-I 型	比良武奈ヶ岳 1962.VII.10 採集 (灰谷博) 前翅 1B 室に一部青色鱗を疎らに散布
1♀-II 型	滋賀県東近江市甲津畑 1959.V.11 羽化 前翅外縁に沿い 1B 室から 5 室まで幅 0.5mm 位の帯状に青色鱗を疎らに散布
1♀-II 型	滋賀県東近江市甲津畑 1958.V.17 羽化 左翅 2,3 室及び右翅 3 室の外縁に帯状に青色鱗を疎らに散布
池田真澄(1976).フジミドリシジミ♀B 型の記録.月刊むし,(60):28.	
3♀-I 型	滋賀県下比良山地 1975.V.10-15 羽化 1♀は前翅中央付近にはっきりした B 斑, 2♀は弱い B 斑 大図録日本の蝶, ゼフィルス大図鑑に写真掲載
山崎孝善(1985).フジミドリシジミ♀B 型を採集.備後の蝶,(2):31.	
2♀-I 型	広島県佐伯郡吉和村(現廿日市市吉和) 1985.V.27,29 羽化 かなり弱い B 型
尾張賢二(1988).B 型♀の飼育羽化例.蝶研フィールド,3(1):31.	
1♀-I 型	京都府与謝郡加悦町(現:与謝野町)大江山 1999.V.7~9 羽化 前翅 1B,2,3 室にやや強い B 斑とかすかな B 斑
小岩屋敏(2007).世界のゼフィルス大図鑑-解説編:284, 図版編:145,147.	
1♀-I 型	宮城 標本写真
有田斉,前田善広(2013).フジミドリシジミ.珠玉の標本箱,(2):3,15.	
1♀-I 型	京都府与謝郡加悦町(現:与謝野町)大江山 1999.V.7~9 羽化 標本写真 前翅 1B,2,3 室に疎らに青色鱗粉を持つ
川辺敏夫(2014).ゼフィルスの異常型.ゆずりは,(60):27.	
5♀-I 型	和歌山県田辺市守山 1♀は前翅中央付近にはっきりした B 斑, 4♀は弱い B 斑 採集した雌からの卵を飼育
三宅誠治(2016).岡山県におけるフジミドリシジミ B 型♀の記録.月刊むし,(550):8.	
1♀-III 型	岡山県新見市神郷油野青笹 2014.V.14 羽化 前翅中央付近と亜外縁に青色紋を発現
丸山正司(2017).フジミドリシジミ♀B 型の記録.やどりが,(254):42.	
1♀-I 型	北海道奥尻郡奥尻町松江 2006.VII.4 採集 標本写真

表 1. フジミドリシジミ B 型♀の記録

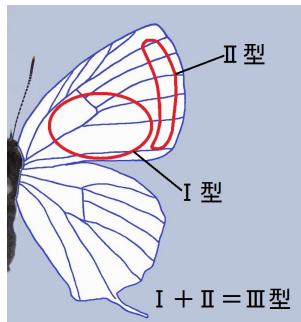


図 3. B型紋のパターン



図 4. 岡山県産のⅢ型 新見市神郷油野青笹
2014. V. 12羽化

B型♀の産地は図5. に示したように、北海道奥尻島と宮城県各1頭を除くと、残り18頭は近畿から中国地方に集中している。これらの地域では、フジミドリシジミは決して多くが採集されるものではなく、その中からB型が多く見つかったということは、B型出現の確率は東日本に比較し西日本の方がはるかに高いと推測される。また、当然予想されることだが、母蝶から採卵して飼育した中から5頭のB型が出現したことから(川辺, 2014), B型の発現には遺伝性があることが分かり、その遺伝的特性が西日本で強いと言うことが本種について言える。

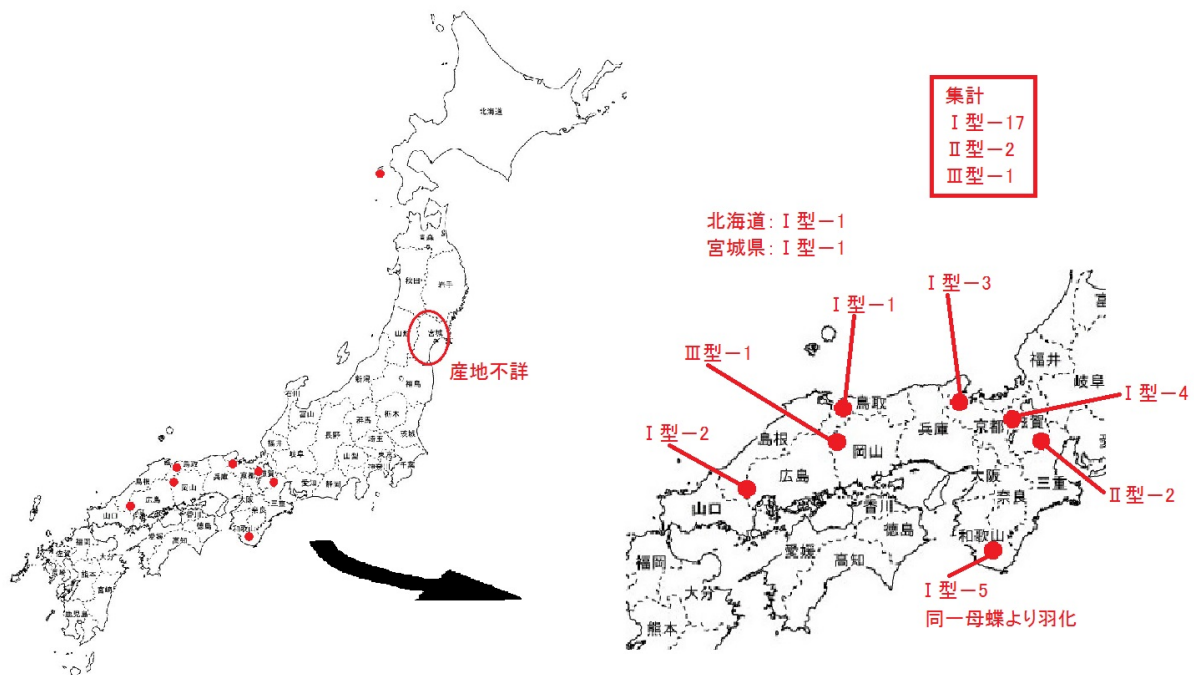


図 5. B型♀の得られた場所

参考文献

- 独立行政法人国立環境研究所, 2014. 「温暖化影響評価・適応政策に関する総合的研究」2014 報告書. 44pp.
- 川辺敏夫, 2014. ゼフィルスの変異型. ゆずりは,(60) : 27.
- 三宅誠治, 2016. 岡山県におけるフジミドリシジミ B型♀の記録. 月刊むし,(550) : 8.
- 三宅誠治, 2017. 岡山県に於けるフジミドリシジミの生息状況. 倉敷市立自然史博物館研究報告,(32) : 7-40.

日本鱗翅学会第64回大会（仙台大会）参加報告

田村 昭夫（鳥取県）

○日時・会場 2017年11月4日(土)～5日(日) 東北大学新青葉山キャンパス
青山コモンズ

○中国支部からの参加者 本田計一（広島県）、田村昭夫（鳥取県）

○大会の概要

- ・ 2017年12月に「蝶と蛾」が3、4合併号として送付される。
- ・ 「蝶と蛾」は2018年から電子化。印刷が必要な方へは、4号分まとめてオンデマンド印刷で対応する。
- ・ 会員数は1067名で、2017年1月時点と変わらない。
- ・ 2018年に自然保護セミナーが大阪府立大学で開催される。開催時期は近畿支部の評議員で協議される。
- ・ 日本鱗翅学会第65回大会は、長野県松本市の信州大学松本旭キャンパスにて開催される。2018年10月20日（土）～21日（日）の日程。大会会長は伊藤建夫氏。公開講演は「高山性生物の成り立ちと現状」の予定。
- ・ 2019年は近畿支部（京都府立大学か京都大学）、その後は2020年北海道支部、2021年東海支部、2022年関東支部、2023年四国支部、2024年近畿支部、2025年九州支部の順番で。
- ・ 会費等に関する規定変更。本学会に初めて入会する31歳以上の正会員は、初年度会費を半額とする。
- ・ 中国支部助成金は申請通り45,000円が認められた。今後は収支、実績報告を提出のこと。
- ・ 今大会初日に中国支部の本田計一氏が「アサギマダラ PA 撮取後との交尾履歴」を発表。
- ・ 「恩原高原ウスイロヒョウモンモドキ特別委員会」が地元団体「上斎原ふるさと掘り起こし委員会」内の「ウスイロヒョウモンモドキ部会」に移行。
- ・ シカの食害（過剰採食）に関する要望書要請を環境省へ提出。中国地区からは「恩原ウスイロヒョウモンモドキ」が出されている。他にあれば要望書の中に追加するということである。
- ・ 講演等
 - 11月4日(土) 第64回大会シンポジウム：東北地方におけるアマチュア鱗翅目研究者たち、一般講演9本
 - 11月5日(日) 特別講演、一般講演8本、小集会2本

第19回日本鱗翅学会中国支部例会

1 日時 2017年11月18日(土) 13:00~17:00

2 会場 ホテルチューリッヒ東方(広島市東区)

3 研究発表

- (1) フレンチ・ギアナ採集記 (田村昭夫：鳥取県)
(2) 山口県のチョウ目録について(2016年) (後藤和夫：山口県)
(3) 岡山県南西部におけるウラギンスジヒョウモンの現況 (藤本徹哉：広島県)
(4) 岡山県のブナ林とフジミドリシジミ (三宅誠治：岡山県)
特別講話「2017 ヒアリ騒動の最前線」 (亀山剛)

4 総会(15:30~)

(1) 現役員の確認(2017年1月~12月)

中国支部長 岡野貴司(岡山県)
中国支部会計 若槻匡志(岡山県)

	広島県	岡山県	鳥取県	島根県	山口県
県幹事	亀山剛(新)	岡野貴司	田村昭夫	淀江賢一郎	村田淳
県自然保護委員	亀山剛(新)	三宅誠治	田村昭夫	淀江賢一郎	後藤和夫

日本鱗翅学会評議員 本田計一, 田村昭夫, 岡野貴司

(参考) 日本鱗翅学会自然保護委員会専門委員会草間台地のウスイロヒョウモン
モドキ保護特別委員会委員長 三宅誠治(岡山)

(2) 報告・連絡事項

- ① 日本鱗翅学会仙台大会報告
- ② 2017年事業中間報告, 2018年事業計画
- ③ 2017年会計中間報告
- ④ 伊万里市教育委員会からのお願い
- ⑤ 「蝶と蛾」電子出版化に伴うメールアドレスの登録
- ⑥ その他

(3) 協議事項

- ① 支部規約の改正
- ② 支部の安定的な運営について
- ③ 会員拡大と各県昆虫同好会の現状
- ④ その他



後列左から

小川，吉田，三宅，
岡，岡村，青木，
澤野，亀山

前列左から

藤本，渡辺，田村，
岡野，後藤，本田

(敬称略)

山口県のギフチョウ採集自粛のお願い

山口むしの会保全委員会

山口むしの会では、山口県のギフチョウが危機的状況にあるとの認識に達し、全国同好の皆様にご協力いただき、2013年春季から無期限で、山口県内での卵から成虫に至る全ステージ、およびカンアオイ類の採集自粛をお願いすることとしました。

本県のギフチョウは、以前はさほど珍しい種ではありませんでしたが、自然環境の人為的改変や植生遷移が進み、最近では地域ぐるみで生息環境の保全活動に乗り出している一部地区を除いて個体数が激減し、かつての多産地でもめったに見かけることができなくなりました。

このような状況下で、日本の西限地域という地域特性からか、毎年採集者が殺到して採集圧を加えるとともに、生息地域の住民や保全活動に取り組む方々との摩擦が顕在化しています。

そこで、まずは本県ギフチョウの窮状を訴え、同好諸氏の賢慮に期待して今後の推移を見極めるのが現状では最善と判断したものです。

採集圧のみを抑制しても個体数が回復する保証はありませんし、法的根拠を伴わず採集“自粛”では決定的な拘束力となり得ないことも承知しています。しかし、何の法的権限もないのにこのようなことを皆様に要請せざるを得ない現状をご賢察ください。

やがて個体数の回復が見込める見極めがつけば自粛を解きたいと考えていますので、趣旨をご理解の上ご協力をお願いします。しかし、今後の状況次第では保全活動と法的拘束力を伴った措置をセットで行政に働きかけることになるかもしれないほどの状況にあることもご認識ください。

最後に、山口県のギフチョウは、せっかく来県されても成虫を見ることすら叶わないことも珍しくありませんし、地元住民が保全活動をしている地域での採集行為はもっての外です。皆様の冷静で賢明な思慮を期待します。

2014年3月吉日

2017年 中国支部会計報告

○収入の部

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	128,219	
2017年支部連絡費	9,500	
2017年支部助成金	0	申請せず
例会参加費	8,000	会員12名，非会員2名
例会山口大会懇親会会計からの寄付金	3,200	2017年1月に寄付される
計	148,919	

○支出の部

項 目	金 額	備 考
支部会報第18号印刷費	64,584	100部印刷
支部会報第18号送料	12,125	封筒，郵送料
例会案内送料	3,994	はがき，切手
例会運営費	18,595	会議室使用料，スクリーン・プロジェクター使用料
事務費	178	出納帳
計	99,476	

繰越金

148,919 円－99,476 円＝49,443 円
49,443 円は 2018 年会計へ繰越します。

あとがき

巻頭の挨拶で述べましたように、今回の中国支部会報の編集にあたっては、支部の安定的な運営の観点から持続的な発行が可能となるようなモデルをめざしました。この会報の財源は、本部からの支部連絡費と支部助成金から成り立っています。この予算内でのページ数、カラー写真の枚数などに留意して編集方針をたて、執筆者のみなさんにもご理解とご協力をお願いしました。その結果、ほぼ予定通りの形で発行することができました。中国支部の会員のみなさまに対して、全国大会参加報告、支部例会報告、支部会計報告は不可欠です。そして、もう一つの大きな柱は研究発表です。今回の4本の研究発表は、海外での採集観察記録、中国各県に密着した調査やデータの集約とバラエティーに富んだものです。これからも支部会報の充実に努めていきますので、会員のみなさまの幅広いご意見をよろしくお願いします。

岡野 貴司

2018年第65回日本鱗翅学会松本大会のご案内

日時 2018年10月20日(土)～10月21日(日)
会場 信州大学松本旭キャンパス(長野県松本市)

2018年第20回中国支部例会のご案内

日時 2018年11月17日(土) 13:00～17:00
会場 倉敷市立自然史博物館(岡山県倉敷市中央2-6-1)
JR倉敷駅から南へ徒歩約13分

2018年役員紹介

支部長 岡野貴司
幹事 広島県：亀山 剛
鳥取県：田村昭夫
島根県：淀江賢一郎
山口県：村田 淳
支部会計 若槻匡志
自然保護委員 広島県：亀山 剛
岡山県：三宅誠治
鳥取県：田村昭夫(委員長)
島根県：淀江賢一郎
山口県：後藤和夫

日本鱗翅学会中国支部事務局
〒710-1312 岡山県倉敷市真備町
辻田 847-5 岡野貴司方
Tel/Fax:086-698-7247
E-mail:ta.okano@tw.drive-net.jp

日本鱗翅学会中国支部会報 第19号

発行日：2018年4月1日
編集者：岡野貴司
発行者：日本鱗翅学会中国支部
印刷所：株式会社トライ・エックス

日本鱗翅学会中国支部会報 第19号 (2018年4月1日)

目次

日本鱗翅学会中国支部規約	表紙 2
支部長挨拶	1
第19回日本鱗翅学会中国支部例会での研究発表	
(1) フレンチ・ギアナの鱗翅目ーヒトリガがいっぱいー 田村昭夫 (鳥取県)	2-5
(2) 山口県の鱗翅目目録について 後藤和夫 (山口県)	6-8
(3) 岡山県南西部におけるウラギンスジヒョウモンの現況 藤本徹哉 (広島県)	9-12
(4) 岡山県のブナ林とフジミドリシジミ 三宅誠治 (岡山県)	13-16
日本鱗翅学会第64回大会 (仙台大会) 参加報告	17
第19回日本鱗翅学会中国支部例会	18-19
山口県のギフチョウ採集自粛のお願い山口むしの会保全委員会	19
2017年中国支部会計報告	20
あとがき, 2018年全国大会・支部例会の案内, 役員紹介	表紙 3

〈表紙写真〉フジミドリシジミ生息地 6.IV.2014 岡山県苫田郡鏡野町越畑角ヶ仙

フジミドリシジミの生息調査を思い立った2010年以降, 秋から春にかけて, 中国山地の山々が雪に閉ざされる厳冬期を除いてブナ林を歩いてきた。当初は, 登山のガイドブックで紹介されるような, 目立った山に登れば結果は見えてくるだろうと安易に考えていた。しかし, しばらく調査を続ける内に, かなり小さなブナ林や, 見落としてしまいそうな谷沿いのイヌブナでさえもフジミドリシジミは生息していることが分かった。また, ブナ林が残っているとは思ってもいなかった植林に覆われたような場所でも, 山頂付近の一角や急斜面となった沢筋などに今なお自生していて, 生息地が次々と見つかり, 結果6年もの間ブナ林を探索することとなった。

表紙の写真は, 春の訪れとともに寒さも緩みだした頃, 「天候は回復」との予報に期待して小雨の中を登ったが, 雨は雪に変わりそして吹雪に。それでも一瞬覗いた青空の下, 雪に佇むブナは凜としていた。

三宅誠治